

保育者養成における音楽授業科目に関する一考察 (2)

— 本学の1年次秋学期から2年次春学期までの器楽関連科目について —

A Study on the Curriculum of Music Education in Nursery Training (2)

— Focused on Our New Curriculum of Fall Semester 2014 for the First Year Students and Spring Semester 2015 for the Second Year Students —

葛西 健治¹⁾・伊藤 仁美²⁾
 今川 典子³⁾・多賀 洋子³⁾・嶋田 陽子³⁾・眞田 千絵³⁾・林 英美子³⁾
 KASAI, Kenji・ITO, Satomi
 IMAGAWA, Noriko・TAGA, Yoko・SHIMADA, Yoko・SANADA, Chie・HAYASHI, Emiko

Abstract

This article succeeds Ito, Kasai, others (2015). It pointed out the curriculum comparison with the junior college era for the following subjects: “Music Seminar (Advanced)” fall semester 2014 and “Music Instrumental Seminar (Fundamental)” spring semester 2015. As a result, instruction of the piano music was more continuous now, and it was proved to be performed thoroughly, and it became clear that inexperienced persons and beginners of the piano grew up steadily. In addition, keeping and improvement of the motivation for the piano acquisition become the problem that is more acute than the junior college era. Therefore invention is taken in the every turn of the curriculum. One of the invention is use of “Lesson Card”, our original teaching material. This was introduced for the first time for spring semester 2015. About the effect, we must inspect it from now on. As a matter of course, we assume its improvement. This study is going to be final on the next article. This is because “Teaching Methods for Musical Expression” which is a main subject of our curriculum is over in spring semester 2016. In the next article, consideration of “Teaching Methods for Musical Expression” will be main. Furthermore, we consider the relation with “Vocal Music” or “Eurhythmics”, and we push forward the comprehensive consideration about our curriculum of music education. It should become the collected studies.

キーワード：保育者養成、器楽（ピアノ）、音楽カリキュラム、保育表現技術（音楽）

1. はじめに

前稿、伊藤・葛西ほか（2015）では、本学の前身である宝仙学園短期大学と本学の音楽授業科目の比較、具体的には、平成18年度（2006年度）入学生（以下、H18年生）と平成26年度（2014年度）入学生（以下、H26年生）について、初年次（前期＝春学期）に的を絞ったピアノ習得の実態、及び開講科目のカリキュラム内容に関する比較考察を行った。

本研究は、将来における本学の音楽授業科目のカリキュラムツリーの再構築をその視野に入れるものである。そこで、その第二弾となる本稿では、まず前稿で扱った

1年次（前期＝春学期）以降の器楽関連科目について、短大時代と本学の授業内容を比較し、その改正された点について詳らかにする。その上で、現在の学生（H26年生、平成27年度（2015年度）現在、本学2年生）のピアノ習得の実態に照らし合わせながら、現行のカリキュラムの妥当性や課題を検証、考察することを目的とする。

2. 短大時代と本学の1年次（後期＝秋学期）から2年次（前期＝春学期）における器楽関連科目の比較考察

短大時代と本学の器楽関連科目¹⁾の対応表を表1に示す。

1) こども教育宝仙大学 専任講師
 2) こども教育宝仙大学 教授
 3) こども教育宝仙大学 非常勤講師

表1 短大時代と本学の音楽関連科目対応表

	1 年次		2 年次	
	前期＝春学期	後期＝秋学期	前期＝春学期	後期＝秋学期
短大時代	基礎音楽 (ピアノ実技) : 1 単位	音楽表現法 I (音楽実技) : 1 単位 ピアノ 特別レッスン : 単位外科目	音楽表現法 II (音楽演習) : 1 単位	
本学	音楽演習 (基礎) : 1 単位	音楽演習 (応用) : 1 単位 音楽演習 (基礎) 再履修 : 単位外科目	器楽演習 (基礎) : 1 単位	器楽演習 (応用) : 1 単位

(本稿で扱う科目については太字で明示した。)

伊藤・葛西ほか (2015) では1年次 (前期＝春学期) の開講科目、すなわち短大時代:「基礎音楽 (ピアノ実技)」と本学:「音楽演習 (基礎)」の授業内容に関する比較考察を行った。またそれに関連して、1年次 (後期＝秋学期) に単位外科目として (前期＝春学期の課題未終了者を対象とした補習的授業として) 開講される、短大時代:「ピアノ特別レッスン」と本学:「音楽演習 (基礎) 再履修」についても、その授業内容の異同を詳細に記している。

本項ではそれらを引継ぎ、1年次 (後期＝秋学期) の正規開講科目である短大時代:「音楽表現法 I (音楽実技)」と本学:「音楽演習 (応用)」の比較、また2年次 (前期＝春学期) 開講の短大時代:「音楽表現法 II (音楽演習)」と本学:「器楽演習 (基礎)」の比較考察を進めていく。

2.1. 1年次 (後期＝秋学期) 開講科目／短大時代:「音楽表現法 I (音楽実技)」と本学:「音楽演習 (応用)」について

2.1.1. 授業の概要

「音楽表現法 I (音楽実技)」(以下、音I)、「音楽演習 (応用)」(以下、音応) は、いずれも1年次 (前期＝春学期) 開講の授業を引き継ぐ科目であり、「担当教員数」「時間数」「教員1人あたりの担当学生数」については、それぞれに変更はなされていない。つまり、これらの項目に関しては、伊藤・葛西ほか (2015: 4-5) における短大時代:「基礎音楽 (ピアノ実技)」(以下、基ピ) と本学:「音楽演習 (基礎)」(以下、音基) との比較考察を踏襲して差し支えないものと考えられる。

また音I、音応に共通する事項として挙げられるのは、前期＝春学期の期末試験の結果を受けて、4つのクラス

を学生の習熟度別に再編成しているという点である。

前期＝春学期までは学籍番号の順で機械的にクラス編成がなされていたため、各クラスの学生の習熟度には、時として大きな開きがある。1クラスあたりの学生数は、短大時代は10～11名、本学では8名程度であるが、習熟度の異なる学生が混在したクラスでは、特にピアノ未経験者や初級者が引け目を感じ、萎縮し、学習のモチベーションが低下するという姿がしばしば見受けられるような状況がある。前期＝春学期に基礎的な技術をようやく習得した初級者が、後期＝秋学期に臨み、更にその表現技術を培っていくためには、無益に他の学生と比較することなく、自身の成長を具に実感できるような学習環境を用意することが必要である。中級者、上級者にとっても、自身に近い習熟度の学生と机、ならぬピアノを並べることが、研鑽を積む上で有用な、健康的な競争意識や緊張感の保持において効果的であるように思われる。

使用教材は音I、音応共に小林美実編著による『こどものうた200』『続こどものうた200』(いずれもチャイルド社) が挙げられており²⁾、短大時代から本学にかけて、1年次 (後期＝秋学期) の授業内容の大枠は踏襲されていることがわかる。

2.1.2. 夏休みの宿題

授業内容の実際を論じる前に、その前段階として学生に課せられている夏休みの宿題について記しておきたい。

短大時代は、2年次の夏休みには実習を見越して「子どもの歌2曲」「ピアノ曲1曲」が宿題として出されていたようであるが、1年次に関しては、夏休みの宿題は出されていなかった³⁾。H26年生に課せられた夏休みの宿題は、春学期の事後学習であると同時に、来るべき秋学期、すなわち音応のための事前学習、導入しての役割も

企図されたものである。

音基（春学期）期末試験の課題は「ピアノ曲1曲（暗譜）」であった⁴⁾。春学期は「幼児の音楽活動を支えるために必要なピアノ演奏の表現技術の習得」⁵⁾が授業の到達目標であるため、子どもの歌の伴奏や弾き歌いはまだ課題とせず、初級者、上級者も含めて、各々の習熟度に応じたピアノ曲に絞って、その指導が行われている。

そこで、およそ一ヶ月半に及ぶ夏休みの宿題としては、期末試験で取り組んだ曲とは別の、新たな「ピアノ曲1曲」を課しているのである。選曲については各担当教員の裁量に委ねられているが、音基の到達目標に達していない学生については、引き続き「音楽演習（基礎）学習チャート」⁶⁾に則った『バイエル』からの抜粋曲が課題となる。

宿題の発表は、音応（秋学期）の初回授業において、期末試験と同様の形式（4クラス合同の発表会形式）によって、「音楽演習（応用）初回試験」として実施され

る。この試験では、楽譜を見ながらの演奏、いわゆる見譜（みんぷ）も認められている。また、お盆前後の学内閉鎖期間や入試実施期間等を除き、本学では夏休み中も学生に対するピアノの無料貸出を実施しており、環境面においても、学生の習練の継続を奨励している。

しかしながら、特に初級者に関しては読譜力の不十分な学生も多く、秋学期の「音楽演習（応用）初回試験」において、読譜を誤ったまま練習をした形跡が演奏の中に聴かれることが少なくない。また、中級者以上の学生についても、練習不足が明白な者も少なからず見られる等、夏休みの宿題の提示の仕方や運用に関しては、まだまだ解決すべき多くの課題が残されていることも事実である。

2.1.3. 授業内容と試験

後期＝秋学期の授業内容について、項目に準じてそれぞれに整理したものを表2にまとめる。

表2 音Iと音応の授業内容と試験

	音I (短大時代、平成18年度(2007年度))	音応 (本学、平成26年度(2014年度))
ピアノ曲	扱わない。	習熟度に応じて任意に選曲。中間試験以降は、春休みの宿題を見越して指導を継続。
音楽理論(楽典)	音名(日、英、伊)、拍子、音部記号、音符、休符、コードネーム、長三和音、カデンツ、属和音、属七の和音、下屬和音、和音の転回形、長音階と調号、短調と短音階、短三和音、調性：二長調、へ長調、ト長調	扱わない。 (ただし1年次秋学期開講の「声楽(応用)」の中で、適宜楽典ドリルによる学習、指導が行われている。)
コードネーム/弾き歌い/伴奏法	<ul style="list-style-type: none"> ・主要三和音と属七の和音(I、IV、V、V₇)の4つのコードを指導。 ・習得する調：へ長調、二長調、へ長調、ト長調(4種) ・共通教材：へ長調「ぶんぶんぶん」「ロンドン橋」「チューリップ」「むすんでひらいて」、二長調「どこでしょう」「みなしずか」、へ長調「しあわせなら手をたたこう」、ト長調「山のおんがくか」 ・へ長調の共通教材(4曲)の移調奏、移旋(同主短調への移調等) ・簡単な伴奏譜による弾き歌い(14回目のみ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・主要三和音と属七の和音(I、IV、V、V₇)の4つのコードを指導。 ・習得する調：へ長調、二長調、へ長調、ト長調(4種)(※指導する順序は各教員の裁量による。) ・共通教材：特に設定せず。ただし「みなしずか」は全学生共通の必修曲。(本学の学生全員が3年次に取り組む宝仙学園幼稚園での教育実習Iで使用されるため。) ・各学生の習熟度に見合った難易度の伴奏譜(オリジナル、簡易編曲)を用いた伴奏法(弾き歌い)
試験	中間：なし。 期末：「音楽理論(楽典)」の筆記試験 その他：「コードネーム/弾き歌い/伴奏法」は、各教員の授業内における課題の発表とチェックを持って評価。	中間：①ピアノ曲1曲(任意、暗譜) ②子どもの歌1曲(任意、コード伴奏による弾き歌い) 期末：①子どもの歌(弾き歌い)1曲(任意、コード伴奏もしくは伴奏譜) ②子どもの歌(伴奏)1曲(任意、伴奏譜、弾き歌いも可) ③「みなしずか」リレー(伴奏譜、クラス毎にリレー形式で)

音Iの事項、内容については、西海ほか(2007: 36-37)の資料1をもとに作成した。音応については本学『2014年度版「26年度 シラバス」』43ページをベースとし、音Iの内容と比較しながら適宜実態を記すよう努めた。

まず全体を概観すると、音Iでは「ピアノ曲」が扱われていない代わりに、「音楽理論(楽典)」の学習が行われ、期末には筆記試験も実施されていたことがわかる。対して音応では「音楽理論(楽典)」の指導が割愛された代わりに、春学期の音基に引き続いて「ピアノ曲」の指導が継続されている。中間試験では暗譜での演奏も課されているが、その後は期末試験を見越した指導ではなく、春休みの宿題、つまり2年次春学期「器楽演習(基礎)」への引継ぎの意味を持つものとして、指導が継続されている。「コードネーム/弾き歌い/伴奏法」については、双方ともに最も重点の置かれた授業内容となっている。

音応における「ピアノ曲」の継続は、短大時代以上に初級者、ピアノ未経験者が数多く入学するようになった本学の実情⁸⁾においては、必然であると言うこともできる。音応は前述の「音楽演習(応用)初回試験」(夏休みの宿題の成果発表)をスタートとして、それぞれの学生の習熟度に応じた新たなピアノ曲の指導が継続される。一方、音Iで「ピアノ曲」が扱われていなかったのは、目前に実習が迫っていたという事情によるところが大きいように思われる。「ピアノ曲」は就職試験の際に課される場合があり、そのための指導が重要であることは短大時代、本学ともに変わりのないところであるが、短大時代の1年次生にとっては「ピアノ曲」よりもむしろ、実習で必要に迫られる子どもの歌の「伴奏法」や「弾き歌い」を習得することの方がより優先度が高く、重要な課題であった。つまり、短大時代は前期の「基礎音楽(ピアノ実技)」をもって「ピアノ曲」の指導を一区切りとし、後期の音Iではコードネームを含む子どもの歌の「弾き歌い/伴奏法」の指導を集中的に行っていたのである。

西海ほか(2007)で度々述べられているのは、音Iにおいては「音楽理論(楽典)」と「弾き歌い/伴奏法」の習得を、一体的に指導するよう心掛け、実践していた、と言う点である。具体的には、共通教材である子どもの歌を題材として、歌詞による通常の歌唱、音名唱、階名唱、指揮、リズム打ち、旋律のピアノ演奏、譜面起こし等、様々なアプローチを試みながら、1曲の子どもの歌を通して、音楽の理論と実践双方の有機的な習得を目指していた、ということである。本学では音応の授業内容から「音楽理論(楽典)」が割愛された代わりに、1年次に通年で開講されている「声楽(基礎(春学期)・応用(秋学期))」の中で、ドリルによる指導が随時実施されている。その意義については伊藤・葛西ほか(2015: 3)に

おいても触れられているが、その指導が実際に、音応における「弾き歌い/伴奏法」の指導の中で効果を発揮できているかどうかについては、今後検証する必要がある。現在「音楽理論(楽典)」を正式に授業の中で指導しているのは「声楽」を担当する葛西専任講師のみであるが、その指導内容の詳細については、音応を受け持つ他の教員との共有が十分に図られているとは言いがたい。その点に関しても、効果の検証と共に、今後の改善が求められるところである。

前述の通り、音Iでは期末に「音楽理論(楽典)」の筆記試験が実施されていたが、肝心の演奏試験は実施されておらず、各クラスの授業内における発表とチェックにとどまっていたことが確認された。理論と実践の一体的指導を謳いながら、最も重要な音楽表現技術について、その確認が試験として実施されていなかったことは、カリキュラムの落ち度であると言わざるを得ない。対して音応では、中間試験にコード伴奏による子どもの歌の「弾き歌い」を1曲、更に期末試験ではコード伴奏もしくは伴奏譜による子どもの歌の「弾き歌い」1曲に加えて、伴奏譜による「伴奏」(歌唱を伴った演奏、すなわち弾き歌いも可)1曲を課し、更には必修曲「みなしずか」の演奏まで全員に求めるという、徹底して音楽の表現技術を問う試験が行われている。確かに、一口に「伴奏譜」と言っても、初級者の多くはオリジナルの楽譜ではなく簡易編曲版を用いる場合がほとんどであるが、それでも試験において、緊張しながら人前で演奏をした後に得られた子どもの歌のレパートリーは、真に尊いものである。この点においては、音応は音I以上に、学生の音楽表現技術の向上と定着に寄与し得るカリキュラムが実践できていると言えよう。

遡って「コードネーム/弾き歌い/伴奏法」の授業内容を見ると、習得するコードの種類(I、IV、V、V7)、調性(ハ長調、ニ長調、ヘ長調、ト長調)は共通しており、大枠については双方に大差はない。しかしながら音Iでは各調に応じて共通教材が設定されており、履修する全ての学生に予め一定の目標が明示されている。一方音応では、教材の選択が各教員の裁量に任されているが、これは特定のレパートリーの習得よりも、各学生のレベルに応じて、確実に4つの調性を学ばせることに重点を置いた姿勢であると言えよう。ただし、音Iでニ長調の共通教材の1つとされていた「みなしずか」については、音応では宝仙学園幼稚園における教育実習Iの対策として、独立した必修曲として扱われるようになった。

音Iで実施されていたような移調奏や移旋については、短大時代に比して更に未経験者、初級者の増加した現在の音応の状況下では、最早指導は不可能である。現在の本学の学生の実態に鑑みれば、移調奏や移旋等、ワンス

テップ上の音楽表現技術を求めるよりも、まず、基礎的な弾き歌いの技術の習得とその定着を図らなければならない。もちろん、学習に耐え得る上級者についてはその限りではないが、特に1年次の段階では、「弾き歌い」のエッセンスともいべき要素——子どもたちを歌の世界へと誘う、ピアノと歌声の一体感——の重要性をしっかりと感得することが、その後に応用力を磨いていく上で基盤となるはずである。

確かに、音楽理論の面から授業内容の変遷をたどれば、音Ⅰから音Ⅱにかけては要求が低くされ、課題が簡略化されていることは事実である。しかしながら、その割愛された時間を有効に転用することによって、音Ⅱでは「弾き歌い」の基礎力の定着に重点を置いた指導が可能となっているとも言えるのである。

なお、短大時代の音楽授業科目の実施状況は非常に複雑で、例えば2年間に渡って通年開講されていた「音楽表現法Ⅱ（声楽）」や、後述する2年次通年開講の「音楽表現法Ⅱ（音楽演習）」と言った科目は、隔週で授業が実施されていたようである。つまり短大時代には、ピアノの学習（1年次後期では当該の音Ⅰ、2年次では「音楽表現法Ⅱ（音楽演習）」）と並行して、学生は歌の授業を履修していたことになり、ピアノと歌の両輪によって完成される「弾き歌い」の習得にとっては、本学の現状よりも理想的な環境にあったと考えることもできる。この点に関しては、稿を改めて、また詳しく論じたい⁹⁾。

2.2. 2年次（前期＝春学期）開講科目／短大時代：「音楽表現法Ⅱ（音楽演習）」と本学：「器楽演習（基礎）」について

2.2.1. 授業の概要

「音楽表現法Ⅱ（音楽演習）」（以下、音Ⅱ（演））、「器楽演習（基礎）」（以下、器基）は、いずれも2年次（前期＝春学期）開講の授業である。

まず「担当教員数」については、音Ⅱ（演）が3名、器基が4名と相違している。

短大時代、1つの学年はA、Bという2つの班に分けられており、音Ⅱ（演）の授業に関しては、それぞれの班の学生が隔週で授業を受ける、という変則的な形態がとられていた。それを受けて、「教員1人あたりの担当学生数」も、1年次（前期：「基礎音楽（ピアノ実技）」、後期：「音楽表現法Ⅰ（音楽実技）」）までは10～11名であったものが、音Ⅱ（演）では6～7名に減少している。つまり、「担当教員数」が1名減となっても、隔週授業の実施によって、授業1コマ当たりの学生数（母数）自体が半減しているため、このような少人数での授業実施が可能となっていたのである。1年次に比して少人数化されたクラス編成では、よりきめ細やかな指導がなされてい

たと推測される。なおクラスは少人数化を受けて再編されているものの、音Ⅰと同様、学生の習熟度に応じた振り分けが実施されていたようである。

一方、本学については、器基（2年次春学期）は原則として音Ⅱ（1年次秋学期）のクラス編成をそのまま引き継いで授業が行われており、当然ながら「教員1人あたりの担当学生数」に変更はない。1年次に培われたクラスの一体感はそのまま継承され、アンサンブル活動（グループ・ワーク、ペア・ワーク）を重視する器基の授業運営において有効に作用している。

「時間数」については、前述の通り、短大時代の変則的な授業実施の形態によって、両者に相違が生じている。

音Ⅱ（演）は隔週授業であったため、通年での履修をもって、ようやく授業実施の総時間数15回が確保されていた。一方、器基は毎週授業が実施されており、半期（春学期）のうちに15回の時間数を確保している。このように実際の授業実施期間、すなわち開講時期が、音Ⅱ（演）は通年、器基は半期であるという相違はあるものの、授業回数は両者ともに15回と共通しており、カリキュラムの内容については、双方を比較考察する意義は一定程度担保されるものと考えられる。

教材については、音Ⅱ（演）、器基共に小林美実編著による『こどものうた200』『続こどものうた200』（いずれもチャイルド社）が、1年次（後期＝秋学期）の音Ⅰ、音Ⅱに引き続いて使用されている。

2.2.2. 春休みの宿題

短大時代は『こどものうた200』『続こどものうた200』から教員が選抜した15曲の子どもの歌を課題曲とし、その中から学生が任意の2曲を選んで弾き歌いをする、という課題が、春休みの宿題として出されていた。その進度チェックは音Ⅱ（演）の初回授業時に実施され、同一時限の各クラス合同による発表会形式で行われていたようである。

本学では「ピアノ曲1曲」「子どもの歌（弾き歌い）1曲」「みなしずか」の計3種類の課題を提示し、短大時代と同様に、2年次春学期の器基初回授業において、班全員の前で演奏するという、発表会形式による進度チェック（試験）を実施している。これは前述の夏休みの宿題の場合と同様に、休暇中の学生のモチベーションの維持、向上をねらいとした、本学の工夫の一つである。加えて、音Ⅱと器基という、年次をまたがった2つの科目の間に出される宿題には、休暇明けに再開される学習をより円滑にスタートするために、たゆむことなく筋肉感覚を研ぎ澄ませてほしいという教員の意図も込められている。

双方の春休みの宿題の内容に今一度着目してみると、短大時代は「ピアノ曲」が出されておらず、「子どもの歌

「弾き歌い」が2曲、となっている。一方、本学では「ピアノ曲」1曲を義務付けている点、また、「子どもの歌(弾き歌い)」が2曲でなく1曲である点が、短大時代と相違するところである。

「子どもの歌(弾き歌い)」を1曲とした理由は、短大時代には出されていなかった「みなしずか」を課題として提示しているからである。これは、音応の期末試験の課題の一つであった「みなしずか」について、春休みを有効に利用して個人への定着を図ろうとするものである。

最後に現行、音応における春休みの宿題の提示方法、および器基初回授業の発表(試験)に関する課題について述べておきたい。

前述の音基夏休みの宿題と同様、初級者にはまだまだ読譜力の未熟さを抱えている者もあり、器基初回授業の発表において、誤ったリズムやメロディのまま曲を覚えて演奏してしまうという場面がしばしば見受けられる。

また、中、上級の力を持っている学生についても、練習不足等による、曲の仕上がりの甘さが感じられることもある。昨今の学生を取り巻く学習環境の変化、例えば中・長期休暇はアルバイト等、学業以外のことで多忙となる学生が増加していることも、要因の1つと考えられる。今後はこのような状況も考慮しながら、更に効果的な宿題の提示が実現できるよう、工夫を重ねていきたい。

2.2.3. 授業内容と試験

2年次(前期=春学期(ただし、音Ⅱ(演)は後期も含む))の授業内容について、項目に準じて整理したものを表3にまとめる。

音Ⅱ(演)の事項、内容については、西海ほか(2007: 38-40)の記述に加え、本稿の共著者であり、当時実際に授業を担当していた多賀講師、今川講師への聞き取りをもとに作成した。器基については本学『2015年度版「27年度 シラバス」』58ページをベースとし、適宜授業の

表3 音Ⅱ(演)と器基の授業内容と試験

	音Ⅱ(演) (短大時代、平成19年度(2008年度))	器基 (本学、平成27年度(2015年度))
ピアノ曲	<ul style="list-style-type: none"> ・ブルグミュラー、ソナチネ等、学生が任意に選んだ独奏曲の指導。 ・行進曲(マーチ)の演奏。 ・初見演奏。 	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度に応じて任意に選曲。中間試験以降は、夏休みの宿題を見越して指導を継続。 ・行進曲(マーチ)の演奏。 ・ピアノ連弾；クラス内でペアを作り、レベルに応じた曲を1つ選択し、演奏。
弾き歌い／伴奏法	<ul style="list-style-type: none"> ・『こどものうた200』『続・こどものうた200』を中心としてレパートリーを増やし、演奏技術、表現力の向上を図る。 ・毎回の授業で1～3曲選び指導し、前期の授業終了時までに10曲以上のレパートリーを持つことを目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本学オリジナルの「レッスンカルテ」に記載されている26曲の子どもの歌を中心に指導し、レパートリーを増やしていく。 ・「レッスンカルテ」以外の子どもの歌にも積極的に取り組み、習得した曲のタイトルはカルテの自由記述欄に追記する。(主として『こどものうた200』『続・こどものうた200』を使用するが、必要に応じて別の楽譜を使用することもある。)
子どもの歌の応用	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの歌の変奏；簡単な子どもの歌の「旋律」「リズム」「拍子」「伴奏型」を変奏する。 ・子どもの歌の合奏；打楽器を中心とした簡易楽器を用いて子どもの歌を合奏する。 ・子どもの歌の創作；音楽技能、音楽表現の集大成として、既成の子どもの歌の「替え歌」の創作と、独自の子どもの歌を作曲する。 	なし。
試験	中間；なし。 期末；①マーチ1曲を3分間演奏(課題曲6曲の中から当日指定される。) ②子どもの歌(弾き歌い)1曲(複数の課題曲の中から任意の3曲を選び、そのうち1曲が当日指定される。)	中間；①ピアノ曲1曲(任意、暗譜) ②子どもの歌(弾き歌い)1曲(任意、暗譜) 期末；①ピアノ連弾曲1曲(任意、見譜) ②子どもの歌(伴奏)1曲(任意、暗譜。弾き歌いではなく、受験者の演奏に合わせて他の学生全員が歌う形式)

実態を記すように心掛けた。

まず、「ピアノ曲」の内容について見ていきたい。

短大時代、1年次後期開講の音Ⅰでは扱われていなかった「独奏曲」の学習が、2年次前期開講の音Ⅱ（演）で再開されており、音Ⅱ（演）、器基共に、子どもの歌の弾き歌いだけでなく、「独奏曲」を通して演奏技術の向上が目指されていたことがわかる。また、双方とも、「行進曲（マーチ）」の演奏が課されているが、1年次（後期＝秋学期）開講の音Ⅰ、音Ⅱでは共に扱われていなかった課題である。これは1学年進級したところでの、発展的な学習内容の設定である。音Ⅱ（演）では、初級から上級までをカバーする6つの「行進曲（マーチ）」（「ビーマーチ」「スウェーデンマーチ」「百年祭マーチ」「ロチェスターマーチ」「ルイビルマーチ」「美しい流れ」）が選曲されていた。一方、器基における「行進曲（マーチ）」の選曲は各担当教員に一任されており、前述の短大時代の6曲の他に、数曲の子どもの歌が「行進曲（マーチ）」のメドレーとして編曲されているものを使用するなど、一人ひとりの学生の習熟度に応じた課題が出されている。なお、器基では、「行進曲（マーチ）」に順調に取り組んでいたのは上級者、中級者のクラスまでであり、残念ながら、初級者のクラスでは、「行進曲（マーチ）」まで指導を行うことは困難であった。

また、音Ⅱ（演）では、読譜力と楽曲に対する想像力を高めることをねらいとして、初見演奏の指導が行われていた。これは、当時の就職試験の実技課題を見越した対策の一つ、という意義を持っていたようである。本学では初見演奏を割愛し、子どもの歌のレパートリーを1曲でも多く増やすことに重きを置いた授業内容を設定している。

次に、「弾き歌い／伴奏法」の項目について記したい。

西海ほか（2007）では、弾き歌いは保育における重要な音楽技術の一つであるとされ、音Ⅱ（演）では、学生個々のレベルに合わせた子どもの歌を選び、各自のレパートリーを増やすと共に、演奏技術や表現力の向上を授業のねらいとしている、と述べられている。その際、歌唱については正しい発声、発音、リズム、音程で歌詞を明確に歌うこと、また伴奏については楽譜の内容やコードネームを正確に捉えて演奏し、歌とのバランスを意識すること等、留意すべき基本的な事項が整理されている。

本学では子どもの歌の弾き歌いの指導において「レッスンカルテ」というオリジナルの学習シートが導入されている。20ページに図1として「レッスンカルテ」の原本を示し、運用状況等について詳述する。

「レッスンカルテ」の運用が開始されたのは平成27年度（2015年度）春学期からであり、その際、2年生と1年生に同時に適用が開始された。本研究の考察対象であ

るH26年生（現2年生）については、「レッスンカルテ」の適用は器基（2年次春学期）がその開始であったのに対し、H27年生（現1年生）については、ピアノ曲を含めて、音基（1年次春学期）、すなわち入学時から適用が開始されている。つまり、すでに連続するこの2学年において、授業運営上の違いが生じているのである。「レッスンカルテ」の運用においては、H26年生はその過渡期に位置しているが、本項ではその部分もありのままに、実態に基づいて項目化した上で、H18年生との比較を進めていきたい。ただし、その学習効果の本格的な検証については、今後のデータ収集を持たねばならない。

H26年生の「レッスンカルテ」の実際の運用状況について述べる前に、本学で「レッスンカルテ」を導入した経緯、ねらいについて記しておく。

昨今、保育者養成校の音楽授業科目においては、保育者に必要とされる基礎的な音楽技術を高めるために、様々な教材の活用や内容の工夫がなされている¹⁰⁾。本学では子どもの歌の弾き歌いの指導に先立ち、ピアノの基礎的な演奏技術の習得を目指して『バイエル』『ブルグミュラー』『ソナチネアルバム（1、2）』等の教則本を用いることは、既述の通りである。これらの、いわば古典的な教材の欠点を指摘して、現在の保育者養成校における使用を「旧態依然」と批判する声も少なからず見受けられるが¹¹⁾、本学ではその利点を評価しつつ、敢えてこれらのオーソドックスな教材の使用を継続している。

その他のピアノ教則本の採用や教材研究についてはまた別の問題として、ここで触れておきたいのは、ピアノ練習曲を一切使用せずに、子どもの歌のみを教材として授業を展開している養成校が少なからず存在しているということである¹²⁾。現場では（当然ながら実習においても）即、活用できるのは子どもの歌のレパートリーであり、ピアノ曲の習得に相当の時間を要することは、一見無用に思えるかもしれない。しかしながら、本学ではそこにこそ、保育者としての土台となるべき基礎的な音楽技術の芯があるものと考え、たゆまずに指導を行っているところである。

ピアノ曲を通じた基礎力の習得を継続しつつ、着実な「子どもの歌（弾き歌い）」のレパートリー獲得を実現するために、その選曲の指針として、この「レッスンカルテ」が導入されたのである。教員は「レッスンカルテ」を用いて、学生一人ひとりのレベルに応じながら、その都度適切な課題曲を提示している。「レッスンカルテ」に選抜した26曲は、学生が保育現場に出る前に必ず習得しておいてほしい曲を精選したものである。生活の歌、行事の歌、季節の歌を織り交ぜ、過去10年間における全国保育士試験の実技試験「音楽表現に関する技術」の課題曲に指定された曲を多く取り入れている点が特徴である。

レッスンカルテ								
		学籍番号()			名前()			
こどものうた	調	日	印	こどものうた	調	日	印	
1 朝のうた				26 山の音楽家				
2 あめふりくまのこ				27				
3 あわてんぼうのサンタクロース				28				
4 犬のおまわりさん				29				
5 うれしいひなまつり				30				
6 うみ				31				
7 大きなくりの木の下で				32				
8 大きな古時計				33				
9 おかあさん				34				
10 おかえりのうた				35				
11 お正月				36				
12 おばけなんてないさ				37				
13 おべんとう				38				
14 思い出のアルバム				39				
15 おもちのチャチャチャ				40				
16 さんぽ				41				
17 しゃぼんだま				42				
18 ぞうさん				43				
19 たなばたさま				44				
20 とけいのうた				45				
21 とんぼのめがね				46				
22 はをみがきましょう				47				
23 まっかな秋				48				
24 みなしずか				49				
25 むすんでひらいて				50				

図1 本学が作成、使用する「レッスンカルテ」の原本

「レッスンカルテ」には、子どもの歌が五十音順に26曲、提示されている。27番以降、50番までは自由記述欄であり、提示曲以外の習得曲が記録できるようになっている。また、それぞれの曲ごとに調、日付の記入欄と、担当教員の捺印欄が設けられているが、これらは学生ではなく、全て担当教員が記載し、管理を行っている。

1年次の音基、音応、また2年次の器基、器応（2年次秋学期開講「器楽演習（応用）」）は、いずれも1コマ当たり4クラスの授業が並行して行われ、それが3コマ続けて（述べ数にして12クラス）実施されているが、これらは専任教員と非常勤講師のチームによって、適宜担当の振り分けが行われている。このため、2年間を通して、学生が同じ教員の指導を受け続けることは稀であり、担当教員が学期によって変わる場合がほとんどである。学生一人ひとりの習熟度については、これまでも担当教員間で申し送りがなされていたが、「レッスンカルテ」の運用によって、一人ひとりの学生の学習状況の把握が、より一層、円滑に進められることが期待されている。

現行のカリキュラムでは、ピアノ演奏の技術や子どもの歌の弾き歌いを、マンツーマンのレッスンによって学ぶことのできる科目は音基、音応、器基、器応のみで、これらは2年次をもって全て終了してしまう。そこで学んだ成果をいよいよ発揮できるのは、授業終了後に取り組む3年次、4年次の実習、そして就職試験においてである。1年次からの学習の成果が試される時に、これまでの自身の学びの積み重ねはどのようなものだったのか、また、レポートはどの程度広がったのかということ視覚的に再確認し、それを一つの励みとし得ることも、「レッスンカルテ」の担う大切な役割であると考えている。

さて、今一度表3に戻り、「子どもの歌の応用」について、内容の比較を行いたい。

音Ⅱ（演）では子どもの歌の変奏、子どもの歌の合奏に取り組んでいるが、既述の通り、音Ⅱ（演）は通年開講、隔週実施という変則的な科目であったため、表3内にまとめられた授業内容は、後期に実施されたものも含まれていることになる。この点は、本学の2年次秋学期開講「器楽演習（応用）」に相当する部分となるため、比較検証については次稿に委ねることとする。なお、器基では「子どもの歌の応用」に該当する授業内容は挙げられていないが、ペア・ワークによる「ピアノ連弾」を通して、学生自身がより豊かな音楽経験を積み上げていけるよう授業内容の工夫がなされており、この点が、包括的な音楽表現技術を習得する上での応用的な要素の補完として実践されているところである。

最後に、試験について触れておきたい。

音Ⅱ（演）では中間試験は行われておらず、期末試験

のみが実施されていた。その際の課題は2つ、1つ目は「行進曲（マーチ）1曲の3分間演奏」、もう1つは「子どもの歌（弾き歌い）1曲」である。いずれも、春休みの宿題の発表と同様の、班全員の前で演奏をする発表会形式による試験が実施されていたようである。一方、器基では中間試験を実施し、そこでは「ピアノ曲1曲（暗譜）」「子どもの歌（弾き歌い）1曲（暗譜）」という2つの課題を出している。こちらも発表会形式による試験として実施されている。ここで注意しておきたいのは、音Ⅱ（演）の授業は隔週での実施であったため、前期の期末試験といえども、実際には全体の半ばの時期、つまり、7回目、もしくは8回目の授業時に実施される試験であったということである。仮に器基の中間試験に相当する試験が行われていた場合、授業回数としては3、4回目という、あまりに拙速なタイミングでの試験実施となっていたであろう。しかしながら、学生のモチベーション向上のためには、課題の絞り込みや実施の工夫等を行った上で、前期の中途の時期にもピアノの実技を問う試験を実施すべきではなかったか、と筆者らは考えている。

3. 平成26年度（2014年度）秋学期から平成27年度（2015年度）春学期にかけてのH26年生のピアノ習得状況

本項ではH26年生のピアノ習得状況について検証を試みたい。短大時代については1年次後期以降のデータが残されていないため、残念ながら比較を行うことは不可能である。

以下、表4に本学H26年生の1年次春学期期末試験から2年次春学期中間試験までの試験曲（ピアノ曲）の進捗別分類一覧を示す。

母数の減少は休学者、退学者によるものである。また前述の通り、「1年秋期末試験」では試験曲に「ピアノ曲」は含まれていなかったため、表4では項目化しない。「2年春期末試験」では「ピアノ曲」に相当するものとして「連弾曲」が試験課題とされているが、こちらはペア・ワークによるアンサンブルであり、楽曲の編成の違いから表4中の進捗に沿って比較できるものではないため、こちらも項目から除外した。

さて、グレード別に推移を概観すると、上級者は「1年春期末試験」から「1年秋初回試験」にかけて1名減となっているが、その後はわずかながら増加傾向にある。中級者は着実な増加傾向を示している。「5.『ブルグミュラー25の練習曲程度』」（以下、序数のみ記載。）のみならず、更にその上のレベルにある「6.」に属する学生は、直近の「2年春中間試験」までに全体の約2割（19名、18.6%）にまで達している。当然ながら初級者は着実に減少

表4 H26年生：1年次春学期期末試験から2年次春学期中間試験までの試験曲（ピアノ曲）の進度別分類一覧

グレード	進度	1年春		1年秋			2年春				
		期末試験		初回試験	中間試験		初回試験	中間試験			
初級	1. 学習経験なし～『バイエル』44番	1 (0.9)	48 (44.4)	0 (0.0)	28 (27.2)	0 (0.0)	23 (22.3)	0 (0.0)	11 (10.8)	0 (0.0)	1 (1.0)
	2. 『バイエル』45番～65番	3 (2.8)		3 (2.9)		0 (0.0)		0 (0.0)			
	3. 『バイエル』66番～84番	14 (13.0)		10 (9.7)		8 (7.8)		0 (0.0)			
	4. 『バイエル』85番以上	30 (27.8)		15 (14.6)		15 (14.6)		11 (10.8)		1 (1.0)	
中級	5. 『ブルグミュラー25の練習曲』程度	40 (37.0)	53 (49.1)	52 (50.5)	69 (67.0)	56 (54.4)	73 (70.9)	66 (64.7)	82 (80.4)	72 (70.6)	91 (89.2)
	6. 『ソナチネ』前半程度	13 (12.0)		17 (16.5)		17 (16.5)		16 (15.7)		19 (18.6)	
上級	7. 『ソナチネ』後半以上、『ソナタ』程度	7 (6.5)		6 (5.8)		7 (6.8)		9 (8.8)		10 (9.8)	
計		108 (100.0)		103 (100.0)		103 (100.0)		102 (100.0)		102 (100.0)	

・表内の数値は上段が履修者数、下段括弧内が%（小数点第2位以下は四捨五入）を示す。
 ・各試験の日程（データの収集日）及び担当者は以下の通りである。

「1年春期末試験」：平成26年（2014年）7月25日：葛西、多賀、今川、嶋田（このデータは伊藤・葛西ほか（2015: 7）の表5内「春学期終了後」のものと同ーである。）

「1年秋初回試験」：平成26年（2014年）9月19日：葛西、多賀、今川、嶋田

「1年秋中間試験」：平成26年（2014年）11月21日：葛西、多賀、今川、嶋田

「2年春初回試験」：平成27年（2015年）4月15日：多賀、今川、眞田、林

「2年春中間試験」：平成27年（2015年）6月17日：多賀、今川、眞田、林

し、直近の「2年春中間試験」に至っては、「4.」の1名を残すばかりである。入学時78人（72.2%）¹³⁾を数えていたピアノ未経験者、初級者の確かな成長がうかがわれる。「2年春初回試験」以降、「3.」以下の学生は0名となっているが、これは1年次秋学期開講の「音楽演習（基礎）再履修」の中で、「音楽演習（基礎）学習チャート」の最終課題（『バイエル』85番）を全員がクリアしたためである。

更に詳しく見てみると、「1年秋初回試験」から「1年秋中間試験」については、「4.」から「7.」までの人数がほぼ横ばいとなっている。これは、秋学期から指導内容が増え、それに伴って試験曲も2曲へと追加されたためであると考えられる。「ピアノ曲」の進度を維持することによって、「コードネーム／弾き歌い／伴奏法」という新たな課題に取り組む学生の負担を最小限に抑えようという配慮の表れであると解釈できる。

「1年秋中間試験」以降は春学期の宿題、すなわち「2年春初回試験」を見越した「ピアノ曲」の指導が継続されるが、そこでは明らかに、学生に対する要求が高められている。「1年秋中間試験」に比して、「2年春初回試験」では「3.」が8人（7.8%）から0人（0.0%）となり、初級者の総計も23人（22.3%）から11人（10.8%）へと半

減している。初級者からステップアップした「5.」の人数は56人（54.4%）から66人（64.7%）へと増加している。「6.」は一見すると横ばいに見えるが、その上の「7.」が7人（6.8%）から9人（8.8%）へと増加していることを考えると、「7.」に属していた学生に関しても、より難易度の高い課題に取り組むようになったことがわかる。

「2年春中間試験」では、先立つ「2年春初回試験」に比して、特に初級者「4.」の減少（11人、10.8%から1人、1.0%へ）が顕著であるが、これは中間試験以降の課題であるペア・ワークによる「連弾曲」への取り組みを見越した、徹底した基礎技術の練成の表れであると考えられる。

本学の「ピアノ曲」指導が短大時代以上に綿密に行われていることは、前項の授業内容の比較において明らかにされたが、その成果は、本項の検証の中に具に表れていると言える。

4. まとめと今後の課題

短大時代は、2年次に進級して間もなく教育実習がスタートしたため、1年次後期には、実習対応のための音楽技術の習得が器楽関連科目においては急務であった。

つまり、1年次後期の時点で「ピアノ曲（独奏曲）」の指導に費やすための時間的な余裕はなく、即、活用できる「子どもの歌の伴奏」を中心とした指導に特化せざるを得なかったのである。それにも関わらず「音楽理論（楽典）」の指導が授業内容の骨子に組み込まれ、期末には筆記試験まで実施されていたことは注目に値する。「音楽理論（楽典）」の指導は、特に「コードネームによる伴奏法」の実践とリンクして一定の効果を上げていたと推察される。

本学の学生が初めて実習に臨むのは2年次の終わりの時期（2月）であり、目前に実習が迫っていた短大時代とは状況が大きく異なっている。そのため、1年次秋学期のみならず、2年次春学期に至るまで、継続的に「ピアノ曲」の指導に当たることが可能となった。しかしながら換言すれば、これはピアノの基礎的な技術の習得に多くの時間を要する学生（ピアノ未経験者、初級者）の激増に対応するための、必要に迫られた措置であるということもできる。また、割愛された「音楽理論（楽典）」の指導は、同時期に開講されている「声楽（応用）」におけるドリルでの指導に補われてはいるが、その効果の如何についてはまだ検証がなされておらず、今後の課題の一つとして認識しておかねばならない。

短大時代の2年目は、すでに就職、卒業を控えた最終学年であったのに対し、本学の2年目は、まだまだ大学生活の折り返し地点にも至らない時期である。かつ、目前に実習がないことで、緊張感が薄れ、学生にとっては中だるみに陥りやすい時期でもある。そのため、ピアノを扱う器楽関連科目においても、徹底した基礎力の定着と同時に、学生のモチベーションの維持、向上のための対応が最優先課題とされているのである。

一方で、「2年春中間試験」までに約1割（10名、9.8%）を数えるようになった上級者についても、その更なるスキルアップのための施策やカリキュラム（もしくはその運用上）の改正が必要であると考えられる。これは、本学の質的向上を図る上で重要な課題である。

次稿ではこれまでの研究を踏まえ、器楽関連科目以外の音楽授業科目を含めた音楽教育カリキュラム全体の包括的な比較検証を行うことを課題としたい。また、短大時代と本学の授業（教室）環境の相違、実習との連関による教材選択の問題等も視座に含め、より精度の高い考察を提示したい。

引用及び主要参考文献

小林美実（1982）、「保育者養成短大に於ける音楽関係授業科目について—本学における考え方と改革の試み—」、『宝仙学園短期大学紀要』7、9-19。

小島弘章（1989）、「保育者養成校における「音楽実技」の一

試み—宝仙学園短期大学からの報告—」、『宝仙学園短期大学紀要』14、13-40。

西海聡子ほか（2007）、「保育者養成校における器楽（ピアノ）教育」、『宝仙学園短期大学紀要』32、33-43。

西海聡子ほか（2008）、「保育者養成校における器楽（ピアノ）教育（2）—初心者における弾き歌いの難しさとその改善の試み—」、『宝仙学園短期大学紀要』33、37-50。

伊藤仁美・葛西健治・多賀洋子・今川典子・嶋田陽子（2015）、「保育者養成における音楽授業科目に関する一考察（1）—本学の初年次音楽教育カリキュラムの比較を通して—」、『こども教育宝仙大学紀要』6、1-10。

注

- 1) 器楽関連科目以外の音楽授業科目（声楽関連科目、表現関連科目等）の詳細については、伊藤・葛西ほか（2015：2）を参照のこと。ただし、前掲書の表2では「音楽演習（基礎）再履修」が1単位と記載されているが、正しくは本稿の表1の通り、単位外科目である。
- 2) 音Iについては西海ほか（2007：35）、音応については『2014年度版「26年度 シラバス」』（編集・発行 こども教育宝仙大学）44ページによる。
- 3) 共著者である多賀洋子講師、今川典子講師の証言による。両氏は短大時代より継続して本学の器楽関連科目を担当する教員である。
- 4) 因みに、中間試験の課題も同様に「ピアノ曲1曲（暗譜）」である。試験曲の検証については、器楽関連科目以外の音楽授業科目（声楽関連科目、表現関連科目等）も視野に入れ、稿を改めて詳しく論じたい。
- 5) 『2014年度版「26年度 シラバス」』43ページ。
- 6) 伊藤・葛西ほか（2015：5）
- 7) 各クラスの8～9人の学生が、陸上競技のリレーのように各自の演奏順を予め決めておき、全8小節の「みなしずか」を全員が連続して途切れることなく演奏するものである。次の奏者は前の奏者の演奏の終わりを見計らって入れ替わりの準備をし、前の奏者の演奏の終わりからタイミングよく、テンポの流れの中で演奏を引き継ぐ、という形式で行われる。全8小節の演奏に加えて、第1奏者は4小節の前奏を、最終奏者は同じく4小節の後奏を担当する。ゲーム的な要素を取り込みつつ、クラスの連帯感を図りながら「みなしずか」への主体的な取り組みを促すことが、このリレーのねらいである。なお、春休みの宿題としての「みなしずか」については、全員が前奏、後奏を付して演奏することが求められている。
- 8) 伊藤・葛西ほか（2015：3-4）
- 9) なお、音Iと「音楽表現法II（音楽演習）」における、特に初心者を対象とした弾き歌い指導の取り組みについては、西海ほか（2008：38-41）に詳しい実践例が示されている。
- 10) 奥千恵子（2009）、「保育者養成と演奏技法—保育指導と

してのピアノ奏法—」、『四天王寺大学紀要』48、152ページ、注2。

- 11) 大地宏子 (2008)、「保育現場で求められるピアノ／音楽技能とは何か？—保育者養成校におけるピアノ教育の有り様の再考のために—」、『鶴見大学紀要』45-3、11-20。等。
- 12) 奥、前掲書、152ページ、注2。
- 13) 伊藤・葛西ほか (2015: 4)、表3を参照。